

万葉の川心まん よう

横浜市立子安小学校 教諭 澤井園子

絹の歌一首

(巻第九 一七二三番歌)

河蛙鳴くかはづ 六田の河の川楊むつた
かはやなぎ

ねもころ見れど 飽かぬ川かも

学生の頃、とある映画を観た。三度の飯より映画好きの友人の勧めだった。本当に良いから是非観てほしいと言われ、そんなに心惹かれることがあるのだろうかといぶかったが、一人映画館に入った。一人で良かった。結果、あるシーンで涙が止めどなく流れた。声は出さず、なぜそんなに泣くのか自分でも分からない。決して、悲しい話だからではない。琴線に触れたというのか、しばらくその場から動けないくらい心動かすものだった。それからほどなく、もう一本の映画に出会った。夢が遠くなりかけていた頃、自分が求めていたものがそこに描かれていた。目をあらためて三回劇場に足を運んだ。魂が欲した。自分が生まれてきた意味というのか、夢か、とにかくやりたいことはこれだと強く強く思えた瞬間だった。人は偶然か必然か、心を揺さぶり離さないものと会うことがある。その揺さぶりを、また、次の誰かに伝えることを文化というのかもしれない。

「絹の歌」とあるのは、歌の内容からして絹という女性が詠んだ歌だと思われる。「河蛙が鳴く六田の河の川楊の根がからむように、熱心に観ても飽きない川よ(君よ)。」いくら見ても見てもなお見たいと心ひかれる川。「川」は、後に歌の意を変えて「飽かぬ君」とされたのではないかと言われている。「ね



茨城県日立市「奥日立きらの里」

もころ」の「ね」にかかる川楊は、中西進編『万葉集事典』(1994 講談社)によると、「川辺に自生し、早春に葉よりも早く黄白色の穂のような花が咲く。生命力が強く、根付きやすい」とある。また、「枝葉の垂れるものに柳、立つ方に楊の字をあて」区別されている。梅とセツトで寒い冬に一番に芽吹き、そのたくましい生命力にあやかり、悪い妖気を払う守護神として屋敷の周辺や水辺を取り巻くように植えられたという説もある。古来から山にも川にも神が宿り、人に生きる力をくれる。木の力強さ、たくましさしかり。それをただ眺める、それだけで人は自然からの膨大な情報と知恵と力その身の中に取り込んでいくのではないかと思う。写真の石碑は茨城県日立市入間町のレクリエーション施設「奥日立きらの里」の万葉歌碑群の中にある。むつた六田の川は奈良県吉野郡吉野町六田と吉野川の対岸、大淀町北六田で、万葉の頃は大きな川淀が広く知られ、一一〇五番歌にも詠まれている。

川も木も花も、哀しみにつけ喜びにつけ、眺める景色の中で誰かを讃え励まし、誰かの中で歌となって歌われ、時代を越えて継がれていく。碑となって伝わり続ける。絹という人が詠んだ歌が、いつしか万葉集に選ばれ、時代を越えて、今を生きる人に届けられるように、想いは生き続ける。